HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	平田, 未季
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第11863号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58895
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Miki_Hirata_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　氏名：平　田　未　季

学位論文題名
注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析

本論文は、マックス・プランク心理言語学研究所内の認知人類学研究グループに所属する研究者たちを中心とする一連の指示詞研究が提示した、注意概念と推意理論を導入した指示詞分析の枠組みを用いて、日本語指示詞コ系、ソ系、ア系の直示用法を分析することを目的とする。

従来の言語類型論的な指示詞研究では、指示詞が持つ意味は対象の空間定位に関わる情報であることが仮定され、主に直示中心 (deictic center) と距離 (distance) という概念を用いて、記述が行われてきた (Fillmore 1982, Anderson and Keenan 1985 等)。これに対して、Levinson (2004) は、従来の類型論的研究が距離概念を用いて指示詞の意味を記述することには先験的 (a priori) な根拠がないと批判した。さらに、Levinson を中心とする認知人類学研究グループに所属する研究者たちは、従来の指示詞研究が指示詞の意味を分析する上で発話場面の文脈情報を十分に検証してこなかったことを批判し、世界的な規模でフィールドワークを行い、それによって得られた自発的な相互行為場面のデータを詳細に分析することによって、指示詞を始めとする空間を表す表現の意味と機能を分析している。その結果、指示詞分析に共同注意 (joint attention)や注意 (attention) 等の認知心理学的な概念や、語用論における会話の推意理論を取り入れた研究が現れ、指示詞分析の理論的枠組みは大きく発展した。

一方、本論文の分析対象である日本語指示詞の直示用法については、国語学・日本語学の分野において佐久間 (1936, 1951) 以来、数多くの記述的研究が行われており、様々な事実が明らかにされている。しかし、日本語指示詞に対して上記のアプローチを用いた研究はいまだ見られない。本論文では、この理論的枠組みを仮定し、注意と推意という通言語的な概念を用いて日本語指示詞の直示用法を分析することによって国語学・日本語学がこれまでに日本語指示詞について明らかにした事実を説明することができるのみではなく、従来の研究では指摘されるにとどまり、その重要性が十分に認識されていなかった以下の 2 つの問題が解決できることを論じた。

(1)　先行研究の残された問題

a. ソ系は「聞き手領域指示」と「中距離指示」用法を持つ多義的な形式なのか、

もしくは両者は同一の原理によって統合することが可能であるのか。統合が可能であるとすれば、どのような原理によって統合されるべきなのか。

b. コ系とア系は、「近」、「遠」という対称的な意味を持つと記述されているにも関わらず、なぜ実際の分布は非対称的であるのか。

以下、上記の枠組みを用いて (1a, b) の問題を分析した結果を述べる。

まず、(1a) のソ系の直示用法に関しては、トルコ語指示詞 şu 及びジャハイ語指示詞 ton との対照分析に基づき、先行研究で多くの議論がなされてきた「中距離指示」用法は、発話時に聞き手が既に視覚的注意を向けている物理的対象を指す「聞き手の注意の存在」を示す用法として再分析できることを示した。この分析に基づけば、談話直示用法や照応用法など、ソ系の持つ非直示用法は、物理的対象に向けられた聞き手の視覚的注意が、言語的対象に向けられた注意に拡張することで生じた用法であり、「聞き手の注意の存在」を示す用法の 1 つの現れとして解釈できる。さらに「聞き手領域指示」は、「聞き手の注意の存在」を示す用法から派生した二次的な用法であることを論じた。従って、(1a) の問いに対し、本研究では以下の説明を提示する。ソ系が持つ 2 つの直示用法は、「聞き手」という要素を介した間接的な指示であるという点で統合することが可能である。ただし、両者は通時的には連続性を持つものの、現在は「聞き手の注意」と「聞き手領域」という異なる原理に基づく別個の用法であり、共時的にはソ系は多義的な形式である。ただし、今後どちらかの用法が衰退していき、ソ系が単義の形式になる可能性はある。

次に、(1b) のコ系とア系については、新グライス派の尺度推意理論を用いて、コ系とア系は情報提供性の異なる対照集合を形成しているという分析を提示した。この分析に基づき、(1b) の問いに対し、本研究では以下の説明を提示する。コ系とア系のうち、空間情報を意味として持つのはア系のみであり、従来コ系が持つとされてきた「近」という概念は、意味的に強いア系の存在によって生じる Q 推意で、破棄することが可能である。空間情報を持たないコ系の指示領域はア系より広いため、両者の分布上の非対称性が生じる。

以上の結論は、冒頭で述べた近年の言語類型論的な指示詞研究が提示した概念と理論を用いた分析によって得られたものである。以下、本論文の内容を章ごとに簡単に要約する。

まず、第 2 章では、マックス・プランクの認知人類学研究グループに所属する研究者らが提示した新たな指示詞分析の枠組みを紹介した。彼らが指示詞分析に注意概念や会話の推意理論を導入した経緯と、その具体的な分析内容を概観し、本研究が用いる枠組みを明らかにした。

第 3 章では、日本語指示詞の統合的な研究で残された問題とされてきたソ系の「中距離指示」用法を取り上げ、このソ系の用法が、距離概念ではなく注意概念によって再分析できることを、注意概念を用いた指示詞研究の代表であるトルコ語指示詞との対照分析をもとに示した。

第 4 章では、注意概念を用いることで、ソ系のいわゆる「中距離指示」用法と非直示用法が統一的に分析できることを論じた。また、日本語指示詞の直示用法と非

直示用法の統一的分析を試みる談話管理理論と本研究のソ系の分析の関連についても述べた。

第 5 章では、従来の研究でほとんど言及されて来なかったコ系とア系の直示用法を再分析し、コ系とア系の非対称性が、言語普遍的な理論である新グライス派の会話の推意理論から帰結する形で説明可能であることを論じた。

第 6 章では、注意概念を用いたソ系の分析と、推意理論を用いたコ系・ア系の分析を統合し、本研究の枠組みにおいて 3 つの項を持つ日本語指示詞がどのように体系化されるのかを示した。また、ソ系のもう 1 つの直示用法である「聞き手領域指示詞」用法がこの枠組みにどのように位置づけられるのかを説明した。

最後に、第 7 章では、まとめと今後の課題について述べた。